ルネ・シュメー編曲「春の海」をめぐって

森本美恵子
末永理恵子

一、作品の成立

「春の海」は宮城道雄の代表作として広く知られている。昭和五年の宮中歌会始の勅題「海邊巌」に因んで昭和四年十二月に作曲、尺八吉田晴風、箏宮城道雄による試演の後、翌年一月二日、放送初演された。宮城自身、「瀬戸内海の島々の綺麗な感じ……のどかな波の音とか、船の艫を漕ぐ音とか、また、鳥の声というようなものをおり込んだ」[註1]と語っているように、標題音楽の性格が強い。また、西洋音楽風の形式、旋律に支えられていることが特徴で、伝統邦楽の系列に属するものではない。須永克己は「宮城氏の此の曲は氏の作曲の中では唯一つの小曲に過ぎず、又格別傑作であるとも言へない」[註2]と言うが、この作品が注目されるようになったのは、昭和七年に来日したルネ・シュメー Renée Chemet がヴァイオリンと箏のために編曲して新鮮な魅力を引き出し、そのレコードが海外でも発売されたからである。

シュメーの経歴

ルネ・シュメーは、一八八八年、フランス、ブローニュ＝シュル＝セーヌ（現ブローニュ＝ビヤンクール）に生まれ、パリ音楽院でベルトリエ H. Berthelier に学んだ。早くからその才能を認められて、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団（ニキシュ）、ライプチヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団（同）、アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団（メルゲルベルク）など、ヨーロッパ各地の管弦楽団と共演し、一九二一年からは

アメリカでも本格的に演奏活動を開始する。レコーディング・アーティストとして多数のレコード録音を手掛け[註4]、また、一九二五年、放送局との提携に乗り出したヴィクターのネットワーク・ラジオ・ショウに出演、メディアによって成功した最初のアーティストでもあった。使用楽器はニコラ・ガリアーノ[註4]。夫はイザイの伴奏で知られるピアニスト、ドクリューズ（ドクルー）C. Decreus である。

シュメーの来日

昭和七（一九三二）年四月七日、ピアノ伴奏者サイドローヴァ A. Seidlova を伴って来日したシュメーは、四月末から四夜にわたって東京劇場で「シュメー女史提琴大演奏會」を開催した。曲目は次の通りである。（プログラム記載による。欧文略）

第一夜（四月二十九日）
ヘンデル作曲「奏鳴曲　ニ長調」ピユーニヤーニイ作曲「前奏曲　アレグロ調」ベートーヴェン作曲「メヌエット調」ボケリーニイ作曲「アレグレット調」モーツアルト作曲「回旋曲」シオーッソン作曲「詩曲」デ・ファリア作曲「通俗的組曲［スペイン民謡組曲］」［抜粋］ワーグネル原作ヴイルヘールミイ編曲「小曲」ヴイエーニアヴスキイ作曲「ポロネーズ　イ長調」

第二夜（四月三〇日）
ヴイヴアルデイ作曲「協奏曲　イ短調」ラロー作曲「スペイン交響曲」セザール・フランク作曲「奏鳴曲　イ長調」アルベニース原作クライスラー編曲「タンゴ」ポルデイーニイ原作クライスラー編曲「踊る人形」デ・ファリア原作クライスラー編曲「短かき人生」

第三夜（五月一日）
バツハ作曲「奏鳴曲　イ長調」ベートーヴェン作曲「奏鳴曲　ハ短調」メンデルスゾーン作曲「協奏曲　ホ短調」

第四夜（五月二日）
ヘンデル作曲「奏鳴曲　ホ長調」バツハ作曲「パルテイータ　ト短調」ラロー作曲「協奏曲　ヘ短調」サン・サーンス作曲「序奏部と狂想的回旋曲」ドヴォルザーク原作クライス



プログラム（4.29〜5.2）
明治学院大学日本近代音楽館蔵

ラー編曲「スラヴ舞踊曲」ローガン原作クライスラー編曲「蒼白き月」トウリナ原作シュメー編曲「ミラマール」

当時国内で発売されていたシュメーのレコードは、「ミネトンカの湖畔にて」やメンデルスゾーン「春の歌」など小品ばかりで、ピアノ伴奏とはいえ、協奏曲などの大規模作品やソナタなど、ヴァイオリン音楽の主流をなす諸作品に触れた聴衆は、世界的演奏家の技術に、その音楽表現に感嘆し、魅了された。五月四日には、シフェルブラット指揮日本放送交響楽団（新交響楽団）との共演で、ラロ「スペイン交響曲」（抜粋）、サン＝サーンス「序奏とロンド・カプリチオーソ」が放送された。

「春の海」編曲の経緯

シュメーは幼時より日本に憧れを抱いていたという。近代的設備より「本当の日本の姿が見たい」（註6）というシュメーは、当然、日本の音楽にも興味をもっていた（註7）。その希望を聞いた須永克己の仲介で、シュメーは宮城道雄を訪ね、箏曲を聴く。演奏されたのは小曲五六種、古曲二三曲、「渓間の水車」「春の海」だという（註8）。「春の海」が殊のほか気に入ったシュメーは、その後二回、宮城との練習を重ね、ヴァイオリン編曲を仕上げた。初演は五月三十一日　日比谷公会堂、東京におけるシュメー告別演奏会である。曲目は、タルティーニ「ソナタ ト短調」、プニャーニ（クライスラー編曲）「前奏曲とアレグロ」、ブルッフ「協奏曲 ト短調」、「春の海」、メンデルスゾーン「協奏曲 ホ短調」。満場の観客の中、四曲目の「春の海」はアンコールで再び演奏された。
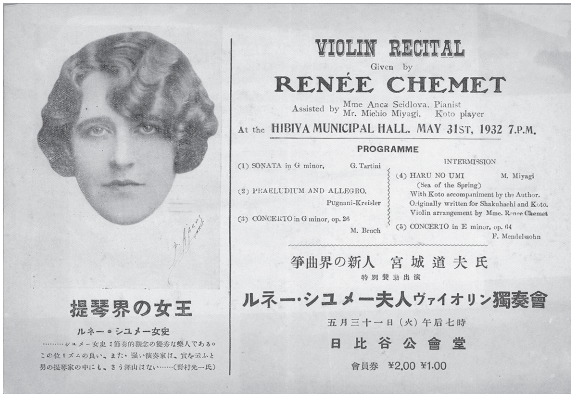
宮城道雄らの新日本音楽運動において、洋楽器を使用することと自体は珍しいことではない。昭和六年、大日本家庭音楽会から出版された「春の海」の楽譜には、ヴァイオリンとピアノで演奏することもできる、と書かれている。しかし、それまでの新日本音楽の作曲家、演奏家は、その演奏技術、表現方法において洋楽器の能力を充分に生かすことができただろうか。「春の海」は、その楽器を知り尽くした一流の演奏家の手によって編曲され、邦楽演奏家との合奏に仕上げられたことで、新たな生命を得たのである。

同年七月、日本ビクターから発売されたシュメー編曲「春の海」は、年末には一万数千を売り上げ（註9）、未曾有の大ヒットとなった。一方、楽譜は、「上野のポラック教授の編輯を受けて保存される」（註10）ことになったというが、どこに保存されたのか判然としない。

離日後のシュメーについて、情報は非常に少ない。一九三三年九月十九日、一九三五年九月七日、一九三七年九月十日のBBCプロムスへの出演記録（註11）と、昭和二十八（一九五三）年、ユネスコ国際民族音楽舞踊祭に参加した宮城道雄がフランスで

シュメーと再会したことを伝える報道のみである。（註12）

昭和二十八年、若きヴァイオリニスト、スターンI. Sternが初来日、熱狂的に迎えられた。歓迎会の席上で聴いた宮城道雄の演奏に感銘を受けたスターンは、演奏旅行終盤の十月二十七日、宮城と「春の海」を共演する。二月に邦楽社から刊行されたばかりの楽譜が提供されたのだろうか。シュメーの編曲からおよそ二十年、スターンはシュメー版の存在を知らず、それを知らされることもないまま、「来日した外国人の演奏家がこういう共演をやったのは、それが初めてだった」（註13）と述べている。





ちらしとチケット（5.31）
明治学院大学日本近代音楽館蔵

（註1）宮城道雄「『春の海』のことなど」『新編春の海』四〇頁。

（註2）須永克己「邦樂演奏會批評　シュメー女史提琴獨奏會―宮城道雄氏等伴奏出演―」一一一頁。

（註3）「樂壇萬華鏡」『音楽世界』四巻五号（昭和七年五月）、六三頁。

（註4）この楽器はその後シュメーの手を離れ、一九四〇年代半ばには、創立間もないスポケーン・フィルハーモニック（現スポケーン交響楽団）のアシスタント・コンサートマスター、ロレインR. Lorraineが所有していた。（Spokane Daily Chronicle. 1947.1.8, p.16参照）

（註5）クリストファ・N・野澤作成のディクコグラフィーには九十二件記載。ヴィクターの記録と照合すると、このうち、およそ十件はシュメー自身の編曲である。「ルネ・シュメーとそのレコード」Renée Chemet (instrumentalist: violin) 参照）

（註6）N記者「シュメーが語る日本の印象」四二頁。

（註7）宮城の箏を聴いたころ、シュメーは三味線の杵家弥

七女塾を訪れて三味線音楽に触れ、「日本芸術の極地」と感嘆の言葉を残している。（「ヴァイオリンの女王三味線楽校杵家弥七女塾を訪う」参照）

（註8）宮城道雄「『春の海』の演奏―シュメー女史について―」二二～二三頁。

（註9）須永克己「流行兒宮城道雄！―邦樂評論―」七三頁。

（註10）須永克己「邦樂演奏會批評　シュメー女史提琴獨奏會―宮城道雄氏等伴奏出演―」一一一頁。

（註11）The Proms archive. Performers. Renée Chemet.

（註12）「海外に活躍する音楽家　ルネ・シュメーと宮城道雄氏」『音楽之友』十一巻十一号（昭和二八年十一月）

（註13）スターン・アイザック／ポトク・ハイム著、大森洋子訳『すばらしきかな、わがヴァイオリン人生』一五二頁。

二、シュメー版の特徴

宮城道雄「春の海」をヴァイオリンで演奏することのできる楽譜は複数出版されているが、いずれもシュメーのSPレコードと完全に一致するものではなく、シュメーの編曲した楽譜そのものの存在は確認されていない。本章ではシュメーと宮城の演奏による録音を採譜したスコアを掲げ、一九六〇年代までに発行された楽譜や比較的早い時期の録音と比較する。比較の対象は以下の通りである。

〔楽譜〕（註1）

尺八またはヴァイオリンと箏

A　大日本家庭音楽会版（一九三一年九月、二版一九三三年二月）　箏譜、五線譜（スコア）

A'　大日本家庭音楽会版（現在刊行中）　箏譜、五線譜（スコア）

B　邦楽社版（一九五三年二月、二版一九五九年五月）　箏譜、五線譜（スコアおよびパート譜）。スコアは尺八と箏。付録のパート譜はヴァイオリン用。

ヴァイオリンまたはフルートとピアノ

C　龍吟社版（一九五六年）　宮城衛編曲。

ヴァイオリンとピアノ

D　全音ヴァイオリン・ピース V-20（一九五〇年代）日比

野愛次編曲。

E　兎塚龍夫、篠崎弘嗣、鷲見三郎編『新しいヴァイオリン教本3・4　ピアノ伴奏譜』（一九六五年四月、音楽之友社）所収

〔録音資料〕（註2）

F　黒柳守綱と宮城道雄による演奏（一九五〇年代）

G　ヴァーツラフ・フデチェックと宮下伸による演奏（一九七六年十二月録音）　宮下伸編曲。
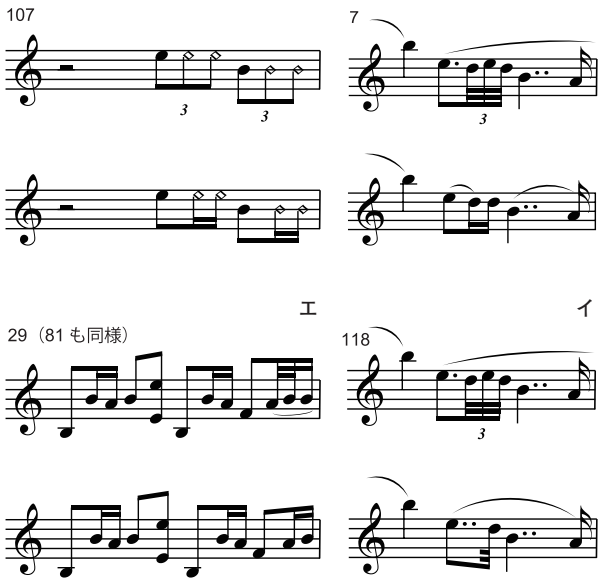
Aはオリジナルの尺八と箏のヴァージョンで、最も古い録音（吉田晴風尺八、宮城道雄箏、一九三〇）と比べると、譜例1のようなリズムの相違が目を引く（下段がA）。しかし、A'を見ると全て譜例上段のように修正されていることから、尺八の演奏を五線に写しとる際の試行錯誤の跡だったのではないかと思われる。

A'ではこのような音の修正とスラーやテヌート等の加筆のほかに、旧版（譜例2ア）で箏の独奏だった第六一小節から六六小節までの間に、尺八を入れるという改訂が見られる（譜例2イ）。
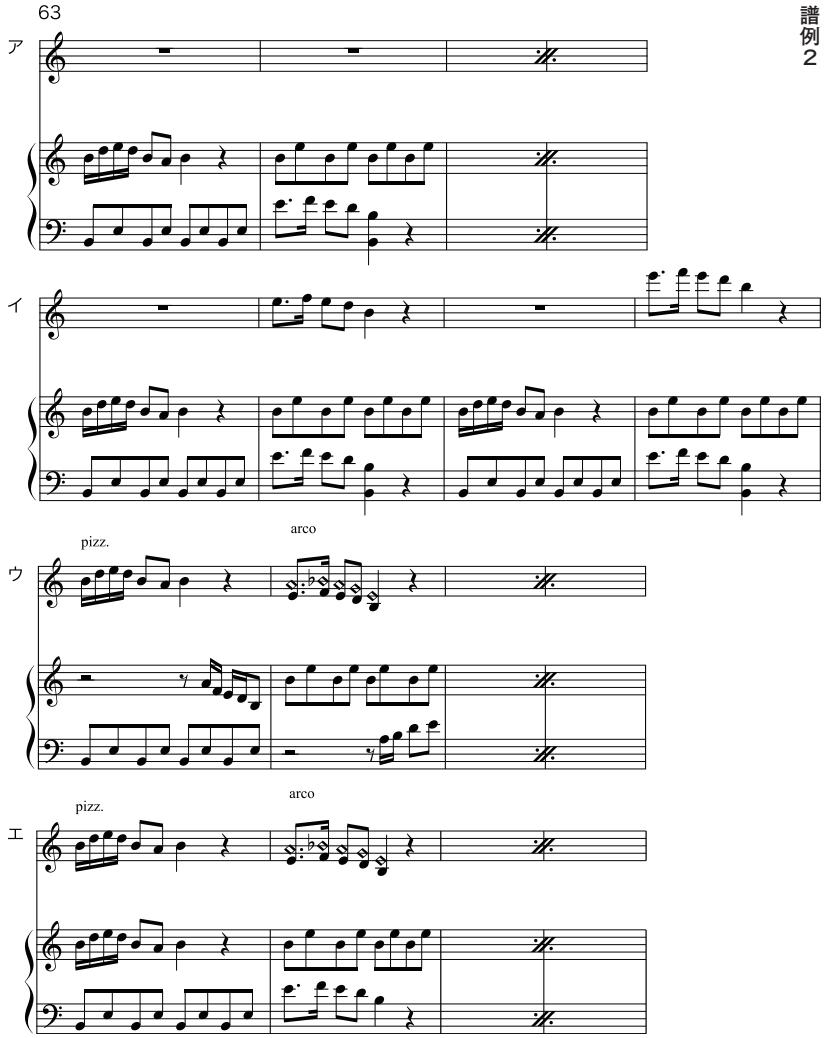
Bは、五線譜のスコアを見る限りにおいてはアーティキュレーションに違いがあること、箏のパートが実音でなく全音高く記譜されていること以外に、A'と大きな差異はない。注目すべきはこれに付属しているヴァイオリンのパート譜が、ピッツィカートやハーモニクスが多用されたヴァイオリン専用の、シュメー版にかなり近い楽譜だったことである。

以上は箏とヴァイオリンのアンサンブルであるが、ヴァイオ

譜例1（ア・イ＝尺八　ウ・エ＝箏）



譜例2



リンとピアノのアンサンブルの楽譜についても簡単に触れておく。Cはピアノとヴァイオリンまたはフルートのために編曲されたもので、ヴァイオリンの奏法の指示は見られない。Dは新交響楽団（のち日本交響楽団、現NHK交響楽団）のコンサート・マスターとして活躍した日比野愛次の編曲で、ヴァイオリン・ピースとして一九五〇年代に出版された。シュメー編曲ともCとも異なる（註3）。前書きにシュメーと宮城による「春の海」の生演奏に接した印象が書かれているので、参考にしていると見られるが、ヴァイオリンを習う子供や愛好者が弾くのには難しすぎるハーモニクスやピッツィカートを避けている。

Eはヴァイオリンの教則本で、編曲者は書かれていないものの、ピアノパートはCに酷似している。ヴァイオリンパートはCをもとに、おそらくDも参考にしながら、ヴァイオリン習得中の生徒が弾いて無理がない程度にピッツィカートなどの指示を書き入れたものと位置づけられるであろう。

続いて、録音資料を検討する。FはNHK交響楽団のコンサート・マスターを務めた黒柳と宮城の演奏で、NHK放送のための録音である。おおむねBによって演奏されており、ヴァイオリンは付録パート譜に類似しているが、ハーモニクスを使う場所などに演奏者独自の工夫を加えたものと思われる。
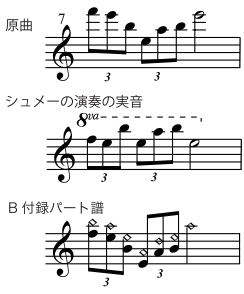
Gは箏のパートに編曲がほどこされているが、ヴァイオリンパートはBの付録パート譜に近い。

次に、オリジナルの尺八版（AおよびB）スコアとシュメー版、シュメー版に非常に近いBのパート譜の差異を検討して得られたシュメー版の特徴を挙げる。

ピッツィカートとハーモニクスの使用

シュメーの編曲は、ピッツィカートとハーモニクス（フラジオレット）を多用して、音色に変化を持たせている。ハーモニクスは尺八の音を、ピッツィカートは箏を模して、掛け合いを楽しむ趣向と考えられる。ピッツィカートの部分は、ところどころオクターヴ下げて演奏し、音が高すぎて余韻が短くなってしまうのを避けている。ハーモニクスについては、開放弦から得られる自然ハーモニクスと指で押さえた音から得られる技巧ハーモニクスのいずれを使っているか、録音を聞いただけでは判然としないが、譜例3などのように原曲の音高をあえて変えている箇所があり（第一八、一一二小節）、鳴りやすく豊かな響きを作れる自然ハーモニクスをなるべく使おうという意図があるのではないかと考えた。この部分の場合、技巧ハーモニクスを使えば、原曲より一オクターヴ高い音が出る音域で、旋律の高低は変えずに旋律が奏でられる。Bのパート譜は、実際にそのように記譜されている（譜例3）。しかし、シュメーが目指したのは忠実なトランスクリプションではなく、より聴き映えのする編曲だったのであろう。この推論に基づき、掲載楽譜のようなスコアを作成した。

譜例3



ヴァイオリンパートの活躍と箏パートの唯一の改変

シュメー版のヴァイオリンは尺八版の尺八パートよりも活躍する。尺八版では箏だけがソロで活躍しているところでもヴァ
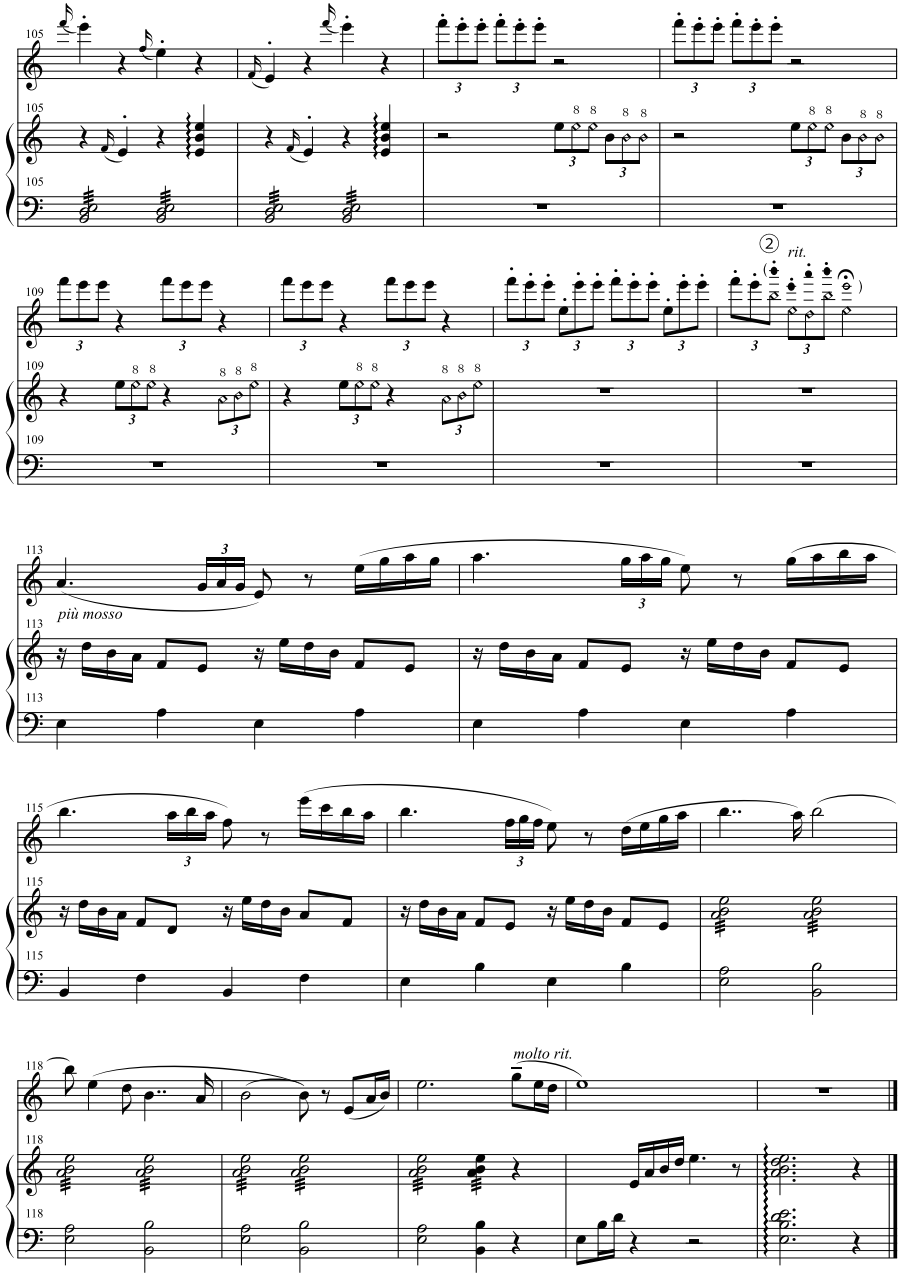
イオリンが旋律を奏で、出番が多い。ことにシュメー版では、第六三小節から第六六小節にかけて、オリジナル版で箏が弾いていた主要なパッセージをヴァイオリンが弾き、箏が合いの手にまわっている（譜例2ウ）が、作曲者自身の生前に出版されているBでも、別のヴァイオリニストと共演したFでも、この部分で箏が合いの手に徹するようにはなっていない。ことにFおよびBのスコアとパート譜を用いる場合の六三、六五小節は、シュメー版と同じくヴァイオリンが原曲から一オクターヴ下がっているため、箏と同音で重なってしまう（譜例2エ）。作曲家がヴァイオリニストと共演した録音資料が多く残されていないので断言はできないが、ヴァイオリニストはかなり即興的に自由に弾くことが許されても、箏のパートは基本的にはあまり変化を加えない方針であると言えそうで、シュメーと宮城のセッションで箏にも編曲がほどこされたのは、異例のことだったのではないだろうか。

掲載スコアについて
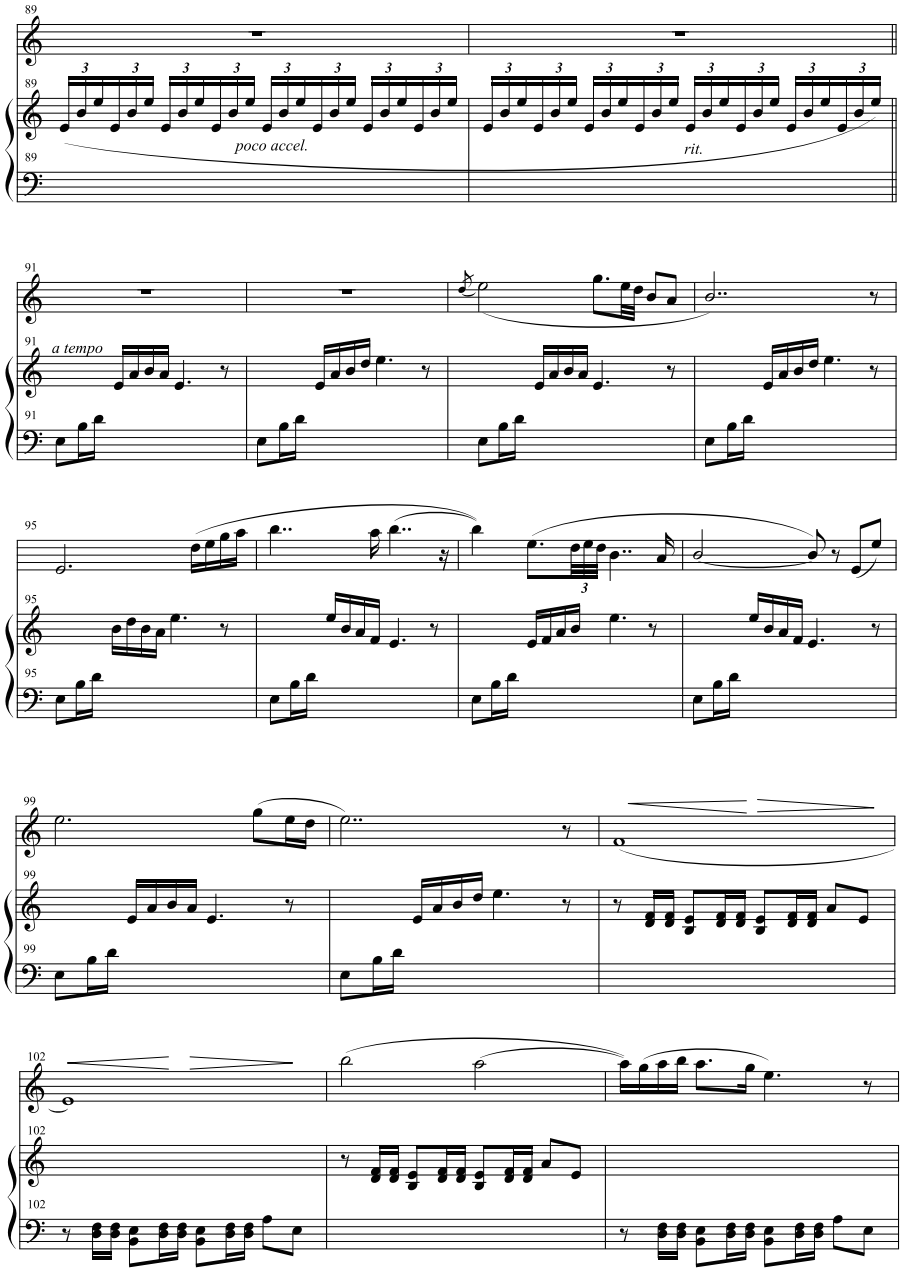
最後にシュメーの録音を採譜したスコアを掲載する。東京オペラシティアートギャラリーで開催された特別展「五線譜に描いた夢　日本近代音楽の一五〇年」展（二〇一三年十月十一日～十二月二三日）の一環で行われたミニコンサート（二〇一三年十一月十六日）のために作成した楽譜に若干の修正を加えたものである。実態を把握するため、同じパッセージが二度目に出現する際に音が異なっていたり、演奏時にたまたま違う音を弾いたのかもしれないと思われるところでもあえて修正はせずに、そのまま楽譜に起こし、尺八版（A'）と比べて異なっている部分に次のような印を付けて示した。
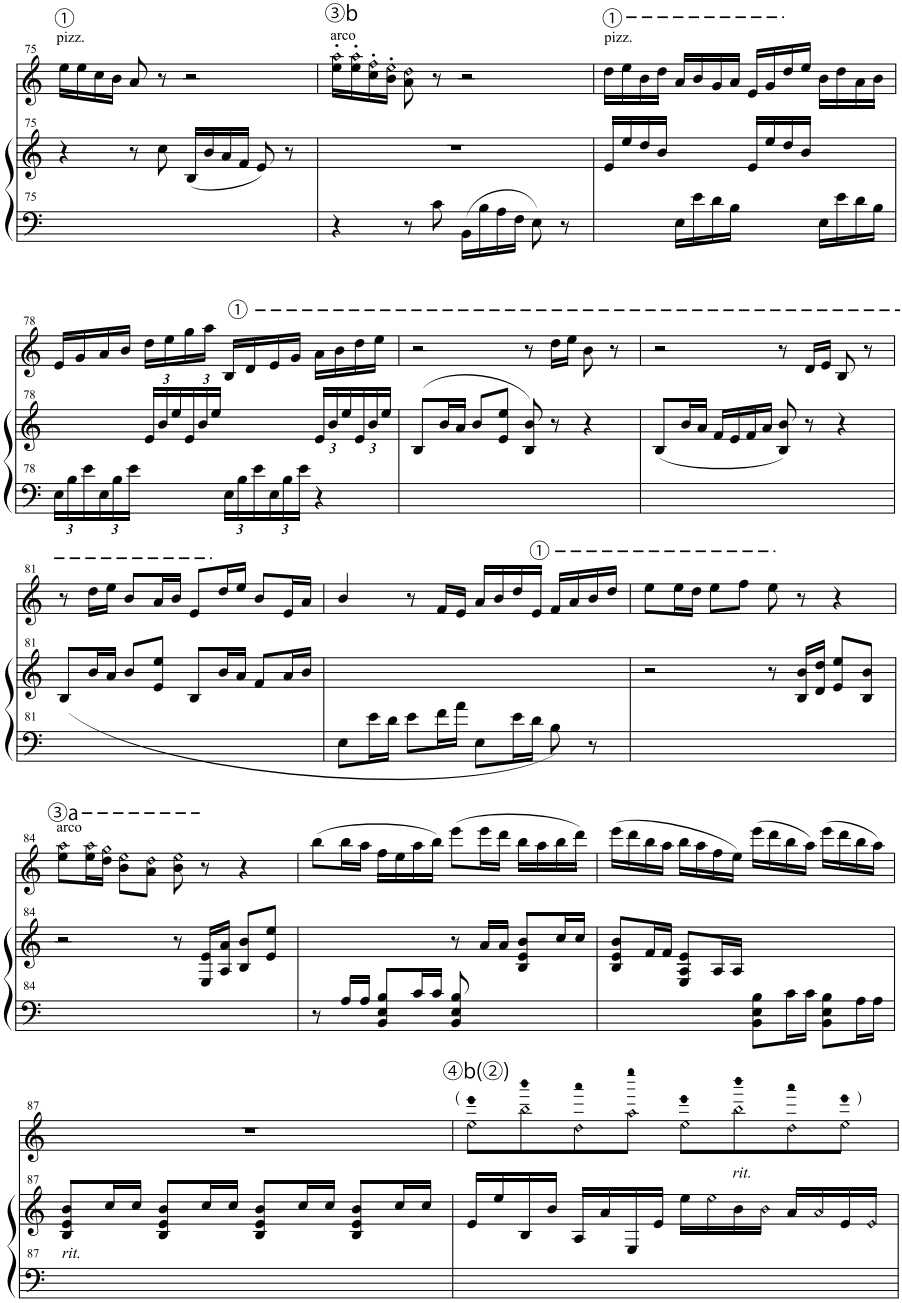
① ピッツィカートを用い一オクターヴ下げる
② 自然ハーモニクス使用に伴い音を変更
③ ハーモニクス使用（a 原曲と比べて一オクターヴ上の音が鳴る、b 二オクターヴ上の音が鳴る）。旋律の音程関係は変わらない
④a 独奏的役割を箏からヴァイオリンに交替
④b 原曲では箏のみに現れる旋律をユニゾンで補強
⑤ 音高の相違（①～④以外）
⑥ リズムの相違

補足説明が必要な場合については表にまとめた。
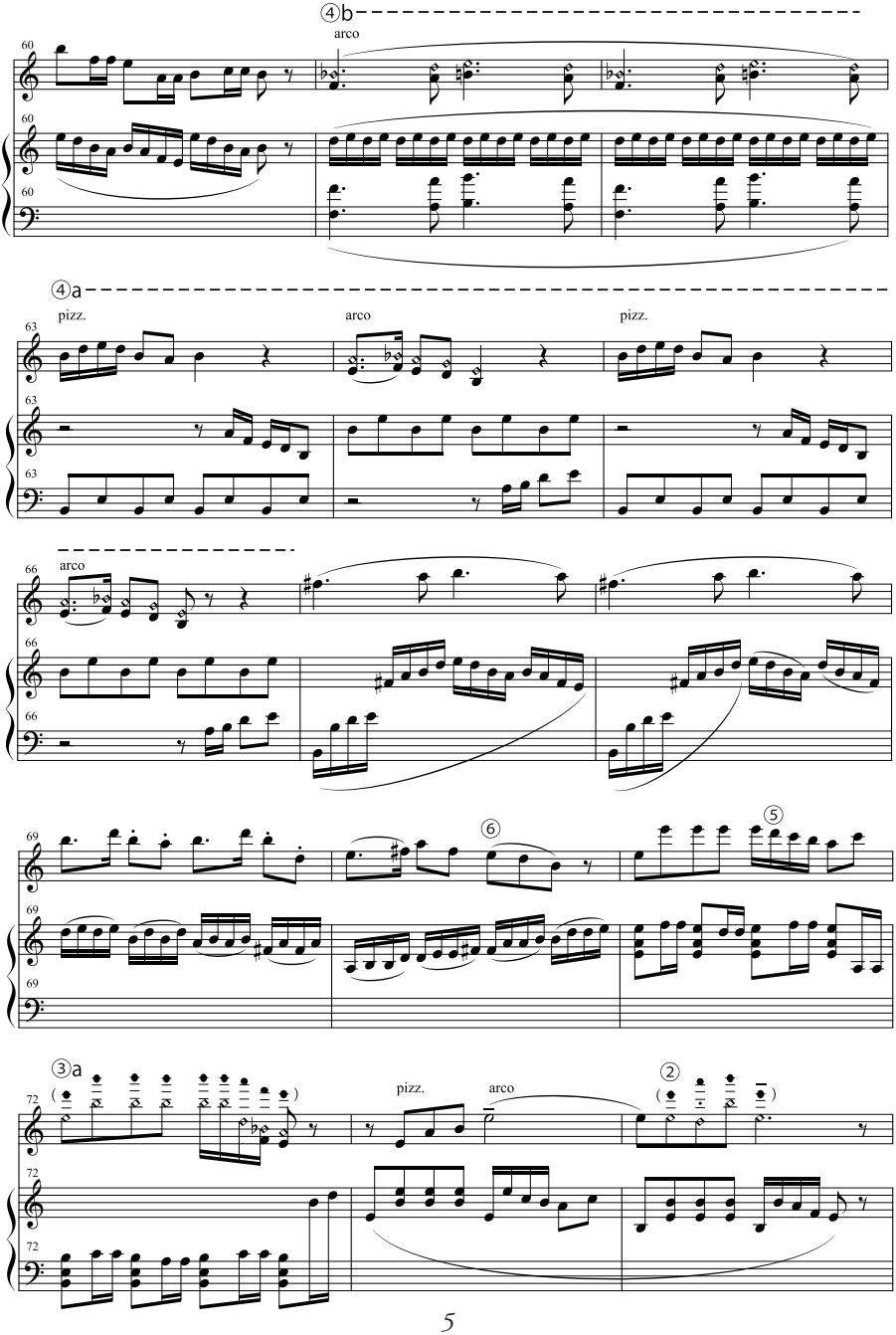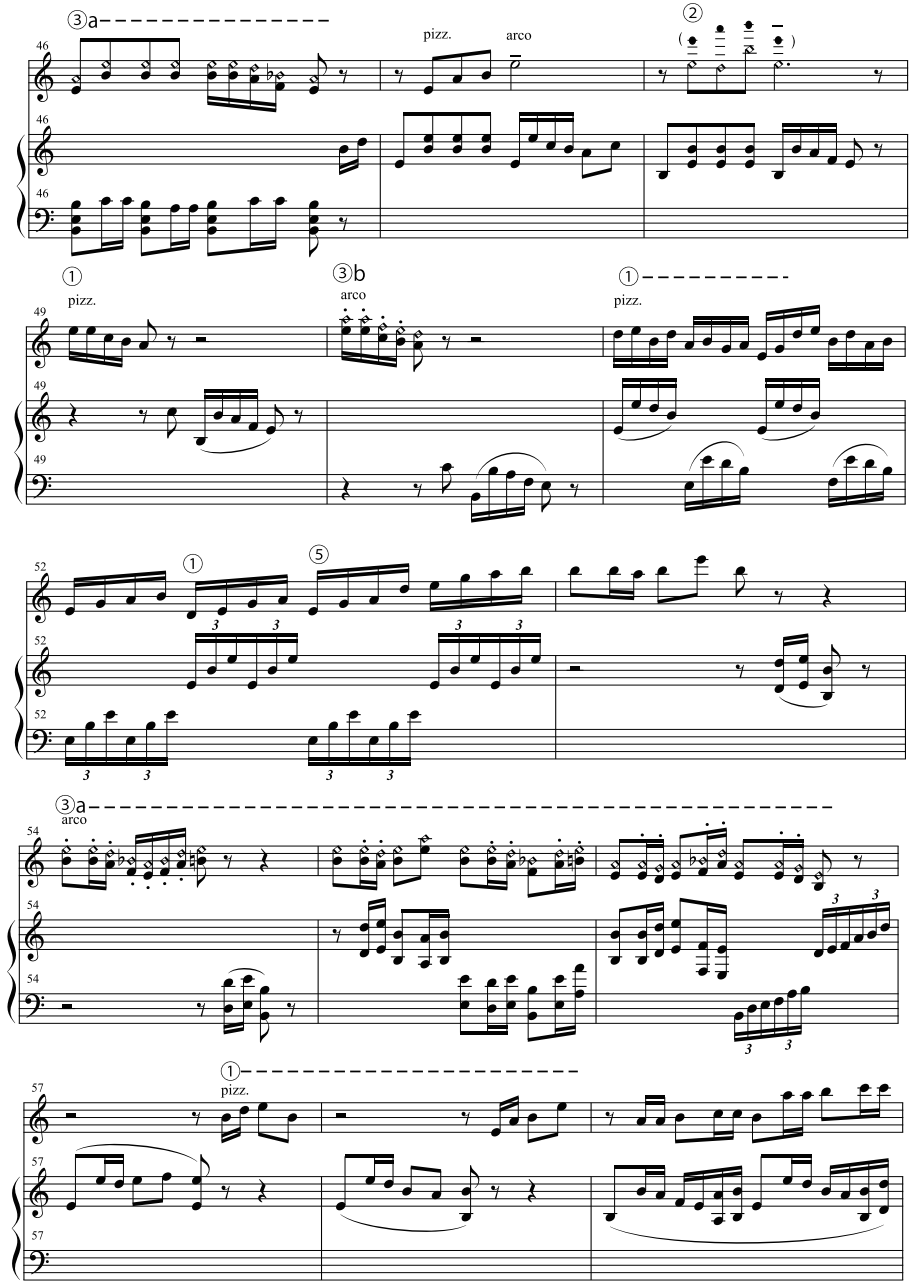


8
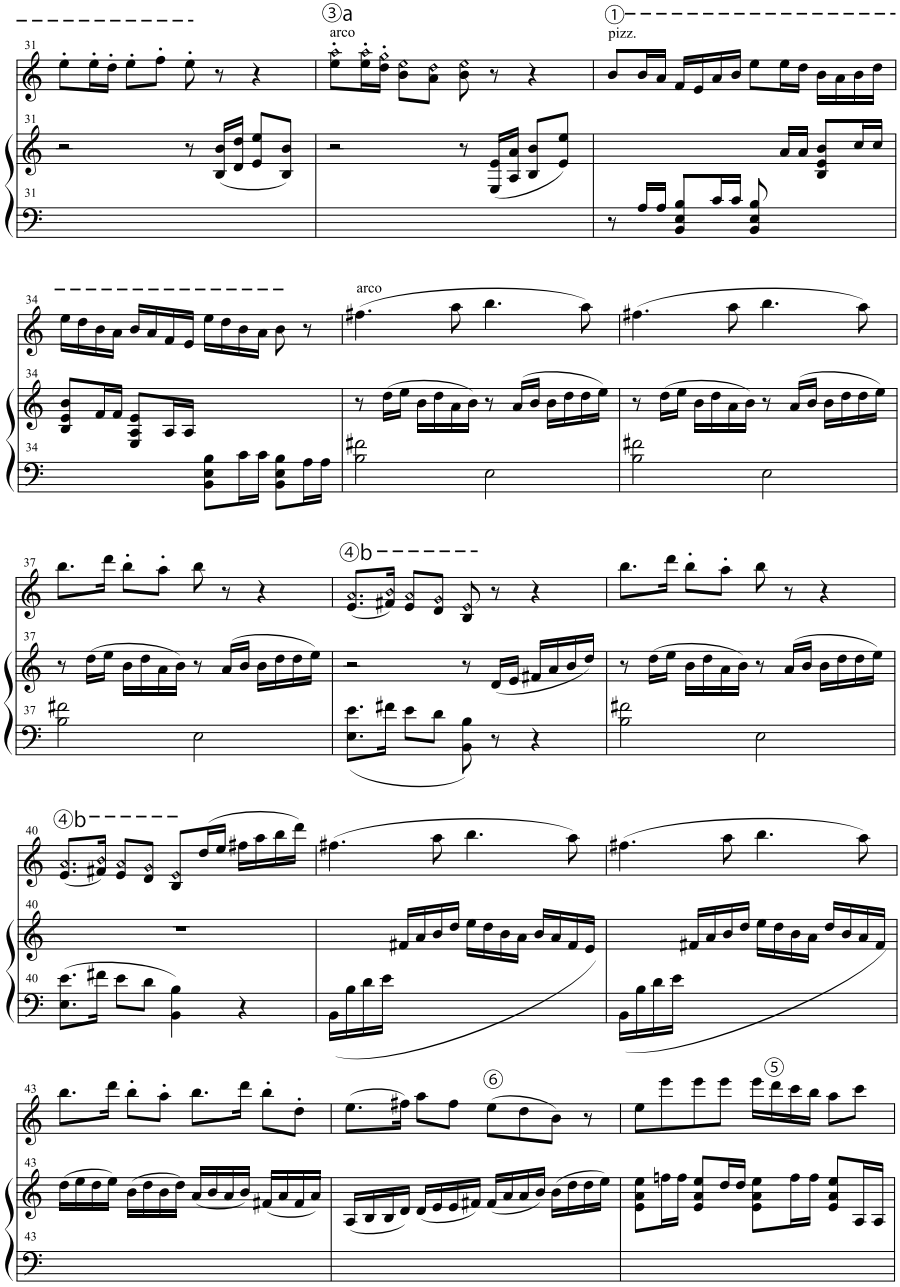

89
poco accel.
rit.
91
a tempo
95
99
102
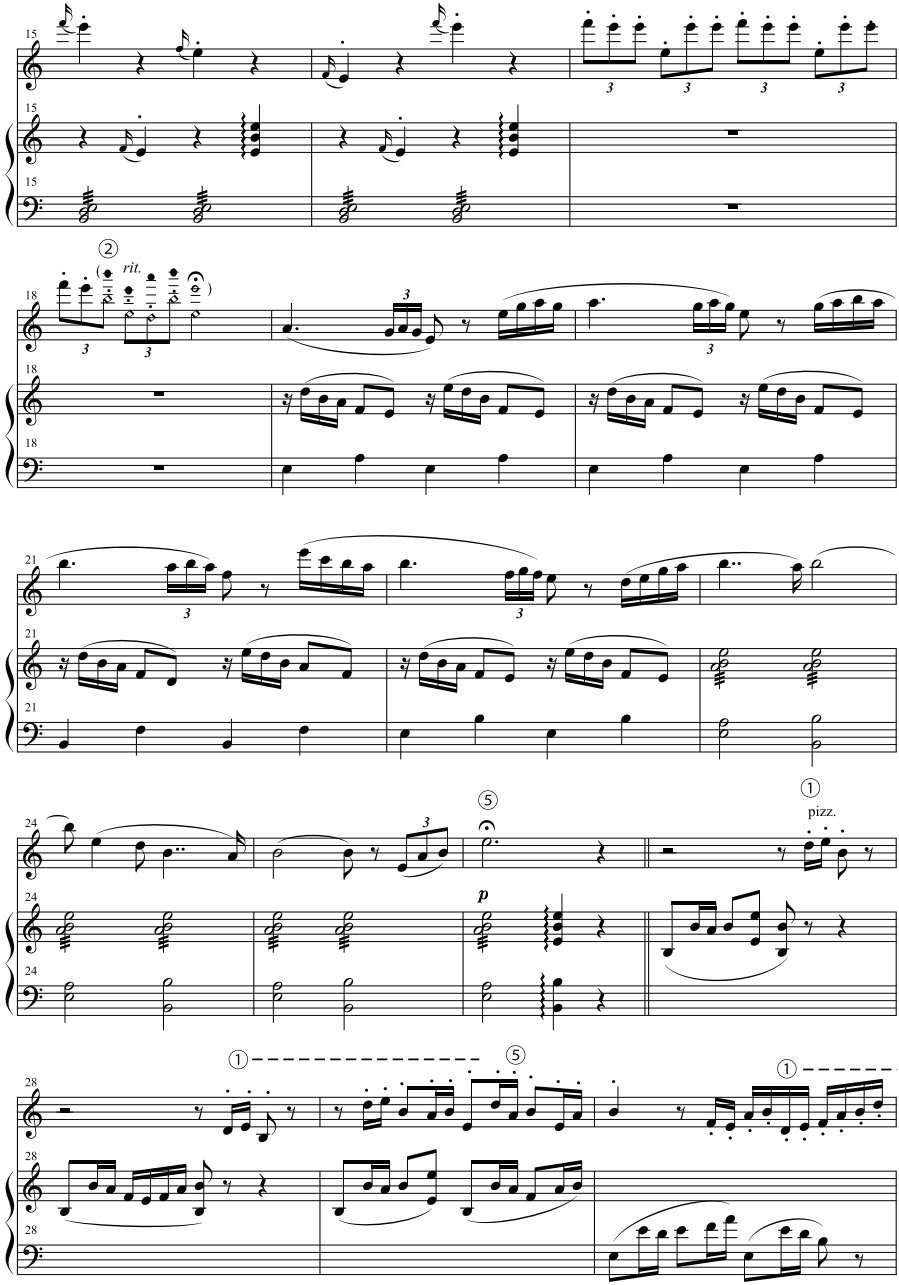


6


④b
arco
④a
pizz.
arco
pizz.
arco
⑥
⑤
③a
pizz.
arco
②
5


③a
pizz.
arco
②
①
pizz.
③b
arco
①
pizz.
①
⑤
③a
arco
①
pizz.
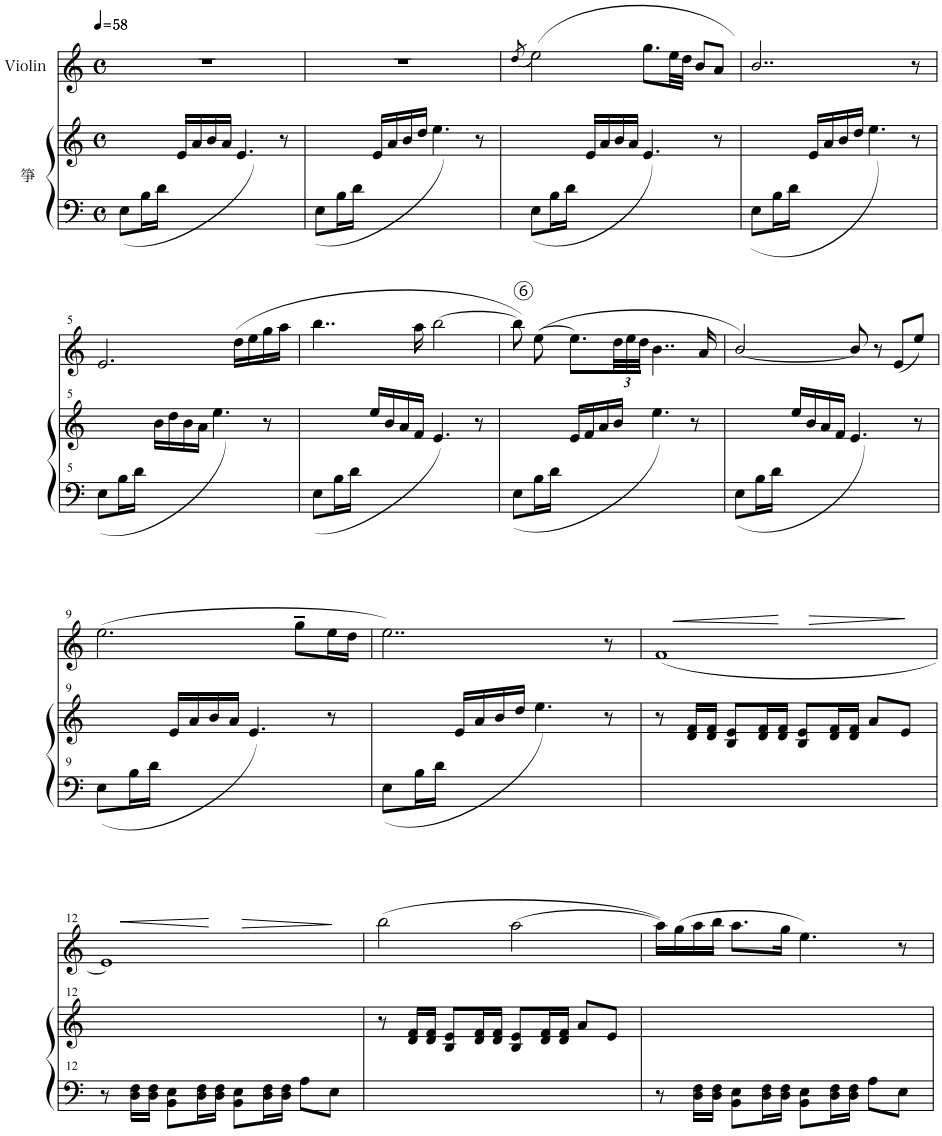


3



2

春の海

宮城道雄作曲
ルネ・シュメー編曲
（採譜：末永理恵子）



1
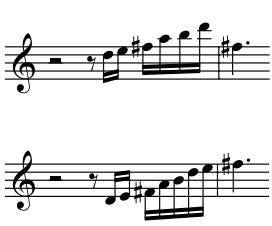
小節	
7	原曲のリズムは譜例アを参照
18、112	原曲の音高は譜例３を参照
24	原曲の旋律は譜例１を参照
26	原曲では１オクターヴ上
29	原曲では２点ホ音
43、70	原曲のリズムは付点八分音符 +16 分音符 + 八分音符
44、71	原曲では３点ホ音
48	原曲では 47 小節と同じ（74 も同様）
52	78 小節と同様になるはずだったのではないかと思われる
60	原曲では最後が八分休符ではなく、16 分音符の１点イ音二つ
63 ～ 66	譜例２を参照

（註１）　Ａの初版と第二版の間の一九三二年にシュメー版の録音が行われているが、今回確認することができたのは第二版である。Ｂ、Ｃは絶版。Ｄは『標準ヴァイオリン名曲集１』（全音楽譜出版、二〇一三年十月）に収録された。

（註２）　Ｆは一九七五年十一月に吉川英史、宮城喜代子監修『宮城道雄大全集』の「補遺篇　名演奏復刻盤　戦後放送篇」（ビクター音楽産業、SJL-2230）でＬＰレコードとして発売され、ＣＤでは日本伝統文化振興財団による『春の海ベスト』（二〇一三年、VZCG-787）に収録された。このＣＤでは、オリジナル版の初録音（一九三〇）である吉田晴風（尺八）と宮城による演奏、シュメーと宮城による録音（一九三二）なども聴くことができる。

（註３）　この編曲の底本となっているのは初版（Ａ）と思われ、一六分音符の三連符の装飾が少なく（一〇回中四回は三連符が用いられている）、譜例２アで示したのと同じように第六一～六六小節がピアノ独奏になっている。また第四〇小節において譜例４のように五連符を用いているところが他の版に見られない点で、Ｅにも採用されている。ピッ

譜例４



ツィカート、ハーモニクスを用いているが、シュメー版よりはかなり少ない。

※一は森本美恵子、二は末永理恵子が執筆した。

参考文献

【演奏会プログラム】

「シュメー女史提琴大演奏會」（一九三二年四月二九日～五月二日　東京劇場）プログラム

「シュメー女史特別演奏會」（一九三二年五月三一日　日比谷公會堂）ちらし

【楽譜】

『宮城道雄作曲集　箏曲楽譜　春の海』大日本家庭音楽会、一九三二（二版一九三三）

『宮城道雄作曲集　箏曲楽譜　春の海』大日本家庭音楽会、二〇一三。

宮城道雄作曲『箏譜　春の海　五線総譜付』邦楽社、一九五三（二版一九五九）

宮城道雄作曲、宮城衛編曲『春の海』竜吟社、一九五六。

宮城道雄［作曲］、日比野愛次編曲「春の海」『標準ヴァイオリン名曲集1』（全音楽譜出版、二〇一三）、三二～三九頁（スコア）および巻頭解説。

宮城道雄「春の海」兎塚龍夫、篠崎弘嗣、鷲見三郎編『新しいバイオリン教本3・4　ピアノ伴奏譜』（音楽之友社、一九六五）、一〇四～一一一頁。

【録音資料】

『日本SP名盤復刻選集Ⅳ』日本音声保存、二〇〇九。

『春の海ベスト』日本伝統文化振興財団、二〇一三（VZCG-787）

吉川英史、宮城喜代子監修『宮城道雄大全集』「補遺篇　名演奏復刻版　戦後放送篇」ビクター音楽産業、一九七五（SJL-2230）

『Václav Hudeček in recital（フデチェック　春の海）』ビクター音楽産業、一九七七（VIC-2051）

【書籍】

吉川英史、上参郷祐康『宮城道雄作品解説全書』邦楽社、一九七九。

スターン、アイザック、ポトク、ハイム著、大森洋子訳『すばらしきかな、わがヴァイオリン人生』清流出版、二〇一一。

千葉潤之介／千葉優子編著『宮城道雄音楽作品目録』宮城道雄記念館、一九九九。

宮城道雄「『春の海』のことなど」千葉潤之介編『新編春の海　宮城道雄随筆集』岩波書店、二〇〇二、四〇～五三頁（初出：『夢の姿』那珂書店、一九四一）

Read, Oliver; Welch, Walter L.. From tin foil to stereo: evolution of the phonograph. 2nd ed., Howard W. Sams, 1977.

【新聞、雑誌掲載記事】

牛山充「提琴界の女王　シュメエ女史を聴く」『東京朝日新聞』昭和七年五月二日付朝刊、五面。

神戸道夫「樂壇日誌（四月廿日―五月十七日）」『月刊楽譜』二一巻六号（昭和七年六月）、八八～九四頁。

神戸道夫「樂壇日誌（五月廿一日―六月九日）」『月刊楽譜』二一巻七号（昭和七年七月）、一〇三～一〇六頁。

茂井一「近く來朝するルネ・シュメエと其レコード」『レコード』三巻三号（昭和七年三月）、二二～二四頁。

須永克己「邦樂演奏會批評　シュメー女史提琴獨奏會―宮城道雄氏等伴奏出演―」『音樂世界』四巻七号（昭和七年七月）、一一〇～一一一頁。

須永克己「流行兒宮城道雄――邦樂評論―」『音樂世界』五巻一号（昭和八年一月）、七二～七五頁。

相馬敏夫「ブライロウスキ氏及びシュメー女史訪問記」『音樂世界』四巻六号（昭和七年六月）、九四～九六頁。

瀧久雄「浪花狂想曲」『音樂世界』四巻八号（昭和七年八月）、一一八～一一七頁。

クリストファ・N・野澤「ルネ・シュメーとそのレコード」『季刊SPレコード誌』一九九八　三巻一〇号、一一八～一二五頁。

野村光一「シュメー女史の提琴獨奏」『東京日日新聞』昭和七年五月一日付朝刊、八面。

宮城道雄「『春の海』の演奏―シュメー女史について―」『月刊楽譜』二一巻七号（昭和七年七月）、二二～二三頁。

渡邊登喜雄「なごや・あらべすく」『音樂世界』四巻六号（昭和七年六月）、一〇七～一一〇頁。

渡邊登喜雄「なごや・あらべすく」『音樂世界』四巻七号（昭和七年七月）、一一四～一一六頁。

N記者「シュメーが語る日本の印象」『レコード』三巻五号（昭和七年五月）、四二～四五頁。

P・Q・R「樂壇社會時評　シュメ女史」『月刊楽譜』二一巻六号（昭和七年六月）、三六～三七頁。

「四月日本へ來るシュメー女史と名器」『レコード』三巻三号（昭和七年三月）、グラビア。

「音樂新聞四月号　愈々來朝するシュメ女史」『音樂世界』四巻四号（昭和七年四月）、一〇九頁。

「提琴のシュメー來る」『月刊楽譜』二一巻五号（昭和七年五月）、グラビア。

「樂壇萬華鏡」『音樂世界』四巻五号（昭和七年五月）、六二～六三頁。

「寫眞ニュース　提琴家ルネ・シュメー女史は……諏訪根自子さんを招いてその演奏を聞いた」『レコード』三巻五号（昭和七年五月）、グラビア。

「音樂ファン待望のシュメ女史出演」『東京朝日新聞』昭和七年五月四日付朝刊、九面。

「音樂會消息」『音樂新潮』九巻六号（昭和七年六月）、九〇～九三頁。

「來朝中のルネ・シュメ女史及びその伴奏者サイドロヴァ嬢をめぐりて……」『音樂世界』四巻六号（昭和七年六月）、グラビア。

「樂壇萬華鏡」『音樂世界』四巻六号（昭和七年六月）、二八～二九頁。

「和洋両琴のアンサンブル」『月刊楽譜』二一巻六号（昭和七年六月）、グラビア。
「音楽新聞一月号　一九三二年度樂壇小史」『音楽世界』五巻一号（昭和八年一月）、一八六～一八九、一八四頁。
「海外に活躍する音楽家　ルネ・シュメーと宮城道雄氏」『音楽之友』十一巻十一号（昭和二八年十一月）、グラビア。
「スターンと宮城道雄の競演」『音楽之友』十二巻一号（昭和二九年一月）、グラビア。
「ヴァイオリンの女王ルネ・シュメー女史三味線楽校杵家弥七女塾を訪う」『季刊邦楽』二六号（一九八一年春）、七四～七六頁。　*初出：『三味線楽』創刊号（昭和七年六月）。
Bouyer, J. Musique enregistrée. Chronique des disques. L' écho d'Alger, 1933.8.9, p.3.
Les disques. L'esprit français. 1933, Nouvelle série no.85, pp.92-93.
Orchestra players use valued violins. 1945.12.7 Spokane Daily Chronicle p.14
Violin concert program listed. Spokane Daily Chronicle. 1947.1.8, p.16.
【ウェブサイト】
The Proms archive. Performers. Renée Chemet. http://www.bbc.co.uk/proms/archive　二〇一四年一月十日参照
Renée Chemet. http://www.78rpmcommunity.com/wiki/view/pageId/5/slug/discography　二〇一四年一月十日参照。
Renée Chemet (instrumentalist: violin). http://victor.library.ucsb.edu/index.php/talent/detail/63198　二〇一四年一月十日参照。